

温州商人の人的ネットワークの可変性に関する考察

A study about variability of Wenzhou merchant's human network

張 華

Hua, ZHANG

【概要】

本稿では、商人家族は、市場から強い影響を受けて変容し、それによって、商人の人的ネットワークも変化する、という人的ネットワークの可変性を用いて、市場における商人の経営成果の変わり様を考察していこうと考えている。そういう問題意識に基づき、中国の家族制度の特徴に関する研究をレビューしたうえで、新中国成立後、市場社会の影響で中国家族は、いかに変容してきたかを明らかにしたうえで、本研究は、①温州の商人家族は、いかに人的ネットワークを活用し、市場チャンスを捉え、成功を取めてきたのかを考察しつつ、②市場での成功が、商人家族にどういった変化を与え、それによって、商人家族がいかに変容してきたのか、③そして、商人家族の変容が、市場にける商人のパフォーマンスにどういうふうに影響を与えているのかという三つのリサーチ問題を導出した。

【キーワード】

人的ネットワーク、商人家族、家族文化

1 問題意識

張（2012、2013、2014、2015）では、温州商人の人的ネットワークの役割および人的ネットワークの多様性について、定量的データと定性的データを用いて、実証研究を行ってきたが、その結論の一つとして、多様かつ大規模な人的ネットワークを構築している温州商人は、その経営規模が大きく、事業志向も企業家志向になりやすい傾向がある。逆に、限定的かつ小規模な人的ネットワークしか持っていない温州商人は、その経営規模が小さく、事業志向も生業志向になりやすい傾向があると考えられ

る。

このように、温州商人の人的ネットワークは、商人の経営規模や事業志向などによって異なり、非常に多様性に満ち溢れているのである。

しかし、商人の人的ネットワークは、そうした多様性を持っているだけではなく、経営規模や事業志向の変化によって、人的ネットワークが増殖したり、縮小したりする可能性が高いと考えられる。

例えば、企業家志向の強い商人は、商店の経営規模を拡大させることによって、店の顧客や取引先が増えて、商人の人的ネットワークも拡充していく可能性が高い。その逆の場合は、商

人の人的ネットワークが縮小していくかもしれない。このような人的ネットワークの変化する性質を、本研究では、人的ネットワークの可変性と呼ぶことにしよう。

温州商人の人的ネットワークに関する本研究において、人的ネットワークの可変性が非常に重要な性質だと考えられるため、ここでは、人的ネットワークの可変性という視点を取り入れて、温州商人の人的ネットワークに関する先行研究を簡単に振り返ってみよう。

まず、西口ほか(2005)、西口(2007)、王(1995、1999、2000a、2000b)の研究は、血縁や地縁をベースとしている温州商人の人的ネットワークは、商人の市場活動において、非常に重要な役割を果たしている指摘した。つまり、温州商人は、人的ネットワークを活用すれば、厳しい市場環境においても、高いパフォーマンスを収めることができるという。

西口、王の研究とは対照的に、史(2004)、陳(2003)は、温州人ネットワークだけに依存すれば、温州のさらなる経済発展が見込めないため、温州商人は、市場において高いパフォーマンスを挙げ続けていくためには、既存の「人格化した取引方式」から脱皮しないといけない。すなわち、血縁や地縁をベースとした温州人独特な人的ネットワークを棄却することであるという。

なぜ、西口ほか(2005)、西口(2007)、王(1995、1999、2000a、2000b)の研究と史(2004)、陳(2003)とは、市場における温州商人の人的ネットワークのパフォーマンスに関して、正反対の結論を出しているのか。

そもそも、血縁、地縁をベースとする温州商人の人的ネットワークに関する研究は、市場における温州商人の成功だけではなく、市場から強い影響を受ける存在である温州の商人家族の変容についても、詳しく考察しないと、「商人家族」と「市場」との関わりをうまく捉えられ

ないのではないかと考えられる。

そのため、本稿では、商人家族は、市場から強い影響を受けて変容し、それによって、商人の人的ネットワークも変化する、という人的ネットワークの可変性を用いて、市場における商人の経営成果の変わり様を考察していこうと考えている。

そういう問題意識に基づき、第二節では、まず、中国の家族制度の特徴に関する研究をレビューしたうえで、新中国成立後、市場社会の影響で中国家族は、いかに変容してきたかを明らかにしたいと考えている。

2 中国家族文化の特徴

2.1 中国家族文化の特徴

甘(2002)、姚ほか(2002)、応(2005)によれば、中国の家族文化には、一般的に、以下のような特徴があるという。

- ① 高い家族凝集性：家族の凝集性とは、家族メンバーは、家族に高い求心力を持っている傾向があるとのことである。家族の高い凝集性は、相互信頼、相互依存をベースとして、持続的に近親同士を家庭と宗族の間に結びつけるための紐帯である。
- ② 大家族理想：家庭の整合性を強調するために、全ての息子が同じ屋根の下で暮らせるという理想である。客観的条件の制約で、一緒に生活できなくても、家族のルールに従い、族長の権威を尊重し、族長のリードに服従すべきである。そして、家族メンバーは、お互いに信頼し、緊密に団結し、古来のルールに従い、祖先を祭り、お墓参りをすることである。
- ③ 年配者(家長)崇拝：中国の家族文化は、家長の権威を尊重し、家庭生活と生産活動

における年配者のリード的役割を強調する。そして、後輩は、家長からの教えを心の中に銘記し、家長への孝行を重視する。中国では、「孝」の最高レベルは、親の事業と品性を継承することである。年配者崇拜の本質は、家長の権威を維持し、若者の積極性と創造性を抑制することにあると考えられる。

- ④ 濃厚な「恥」文化：中国の家族文化は、家族本位を強調し、同じ家族の人には「一損俱損、一栄俱栄」¹という考え方を持っているため、恥に対する抑制力は、主に家族から発生し、個人への評価も主に同一家族のメンバーが下すことになっている。

上記のように、中国の家族文化において、高い家族凝集性、大家族理想、年配者崇拜、濃厚な恥文化が重視されているが、その家族文化が、一体、人々や組織にどのような影響を与えているのかについては、姚ほか（2002）の研究では、指摘されているため、本研究の参考になると考えられる。

2.2 中国家族文化の影響

姚ほか（2002）は、中国の家族文化が、中国人の行動のあり方や企業組織への影響を分析する際に、以下のことを指摘した。

- ① 家族主義、関係主義を中心とする特殊主義は、伝統主義の特徴であり、市場主義、契約主義に基づく普遍主義は現代社会の特徴である。現代社会は、必ずしも普遍主義を中心としないが、五千年にも及ぶ中国の伝統社会においては、特殊主義は、確固たる体系を構築してきた。
- ② 中国の企業組織は、家族主義、関係主義を

中心とする特殊主義から大きく影響されている。例えば、企業の人事においては、上司は、親交のある部下を優先的に昇進させたりするなど、年功序列が、業績より重視される傾向がある。

- ③ 特殊主義は、特殊関係による信頼関係の構築を重んじ、契約による信頼関係の構築を軽視するため、特殊主義の蔓延は、近代制度や市場ルールの確立を阻害する。

姚ほか（2002）の研究に従えば、伝統的な家族文化は、中国社会にまだ根強く存在し、人々の行動に影響を与え続けているという。家族文化の影響を受けている温州商人も、家族や親戚をベースとした人的ネットワークに強く依存し、市場活動を展開してきている。

しかし、温州商人の市場活動は、家族文化に影響される一方、その家族文化、あるいは、家族制度も、近代社会から強い影響を受けて変わり、それによって、商人家族も変容を遂げていくはずである。温州商人の人的ネットワークの核心部分は家族や親戚であるため、家族の変容は、当然、人的ネットワークにも大きな影響を及ぼすと考えられる。

こうした議論の流れに沿って、次の節では、近代中国における家族の変容を考察していこうと考えている。

3 近代中国における家族の変容²

近代中国における家族の変容について考察する際に、先駆的な商人家族研究として評価が高い石井（1996）が非常に参考になる。石井（1996）では、日本の商人家族について次のように指摘している。

「[家族]は、わが国の小売業を理解するうえで不可欠の要因である。妻は無給で主人の商

売を手伝い、息子は商売を後継する。兄弟・親戚もまた、なにかれと、その商売に関与する。まさに「家族」関係（あるいはもう少し広げれば「親族」）関係こそが、わが国の小売業を支えてきたといっても過言ではない。」（石井、1996、p.32）

ここでは、まず、商人家族に関する石井氏の議論を参考にしながら、商人家族を定義しておこう。すなわち、商人家族とは、商人の親子や兄弟など、商売に関与する直系家族を中心として、その親戚も含めた家族メンバーのことである。商人家族という概念は、常に家族制度の影響を受けて、ダイナミックに変容する存在である。家族変容という視点から、石井氏は、近代日本における商人家族の変容を表1-1のようにまとめている。

つまり、近代化した社会において、市場経済の流れの中で、伝統的な家族制度や家族文化がその影響を受けた結果、もともと消費単位と生産単位が一体となっている拡大家族が、単なる消費単位の核家族へ変化し、家族制度そのものが崩壊しつつあると指摘されている。

本研究では、この石井（1996）研究を参考に、近代中国における家族の変容を、「改革・開放」政策の実施をきっかけとして、二つの段階に分けて、考えていくことにしたい。

3.1 新中国成立から「改革・開放」に至るまでの中国の家族変容

1949年の新中国成立から、1957年まで、中国政府は、農業、資本主義手工業や商業を社会主義化することによって、産業の社会主義改造が行われていた。それによって、中国本土において、形式上では、資本主義が完全に消滅したと言われている。その結果、都市部の家庭のメンバーは、様々な国有企業の従業員となり、家族は、統一した生産単位ではなくなる。

一方、農村では、行政組織において、人民公社、生産大隊、生産隊という三つの階層組織に分けられ、それぞれの組織が、農村の生産活動の全般を管理する仕組みとなっている。また、農地の所有権が国や地方政府に移り、農民は、人民公社の社員として出勤し、月単位で給料をもらうようになった。そのため、人民公社が生産資料の所有者になったと同時に、農業の生産単位にも変身した。その代わりに、農民家族は、生産単位から純消費単位に変わり、農業生産プロセスからの撤退を余儀なくさせられた。

3.2 「改革・開放」後の中国の家族変容

1979年の「改革・開放」により、都市部では、家族は、若干の生産資料を獲得し、自ら生産の計画や管理を行うことができるようになった。それにより、都市部では、家族を主な生産単位

表1-1、日本の商人家族—伝統的家族と近代家族

伝統的家族	近代家族
生産のための世帯	消費のための世帯
商売と住まいとは近接	商売と住まいとは分離
世帯規模が大きい（3世帯家族）	世帯規模が小さい（核家族）
家庭内で行われた商人教育	学校に委ねられる教育
妻は貴重な経営資源	夫は商売、妻は主婦
結婚は見合い	結婚は恋愛
共同体に巻き込まれる	共同体とは一線を画す

出典：石井（1996）、p.17より引用。

とする家族企業が誕生した。

農村では、長年にわたって続けられてきた人民公社が廃止され、その代わりに、家庭聯産請負責任制が導入され、農業生産隊に集中していた農地、農具等の生産資料が農民の手に分配されるようになった。農民は、毎年一定量の収穫量を国や地方政府に納めればよいと、農業生産活動への参加意欲が著しく高められた。家族による農業への取り組みが再開されることによって、家族が再び、農村の農業生産活動の主役となり、各地では、文化大革命で焼かれた族譜の修繕活動がかなり盛んに行われるようになった³。特に、浙江省や福建省等の家族意識の強い地域において、家族ベースでの生産活動が一気に活気づいた。

また、人口の増加圧力により、1979年に中国政府が一人っ子政策⁴を実施した。この人口抑制政策の実施に伴い、家族の少子化が一つの流れとして現れ、非民主的とされる家庭における家長の権威構造が、子供の希少化により、徐々に崩れつつある⁵。そのため、家族内において、家族メンバーの自由の幅が格段に大きくなり、個人の自由が尊重されるようになった。

さらに、女性の社会的地位の上昇に伴う女性の社会進出、共働き夫婦のようなサラリーマン家族の増加等により、伝統的な大家族に大きな変化が生じ、核家族へ変身しつつある。

1949年の新中国成立後から1979年「改革・開放」政策が実施されるまでの30年間、中国社会における家族の変化は、主に共産主義路線が、各地域の都市や農村で実施され、それによって、もたらされたものであると考えられる。

しかし、我々の関心である市場経済による近代化の影響は、1980年代以降に、徐々に現れると言えよう。「改革・開放」政策が実施されて以来、まもなく30年の歳月が経とうとしている。その間、中国政府は、従来の計画経済を放棄し、近代的な市場経済への移行を推進してきた。中国経済の高度成長や急速な近代化とともに、欧米の先進的技術や社会制度が導入され、欧米文化も近代化の象徴として、中国に渡来し、人々の生活の中に溶け込みつつある。近代的な市場制度の確立や、あるいは、家族主義と対峙する個人主義の台頭は、商人家族に大きな変化をもたらしていると考えられる。

本研究の研究対象である、温州の商人家族に限って言えば、急激な近代化の結果、伝統的な商人家族に大きな変化が生じ、表1-2のように、商人家族が、近代家族に向けて、変容しつつあると思われる⁶。

表1-2、温州の商人家族—伝統的家族と近代家族

伝統的家族	近代家族
生産のための世帯	主に消費のための世帯
商売と住まいと同じ場所か、近接	商売と住まいとは分離しつつある
世帯規模が大きい(3世帯家族)	世帯規模が小さい(核家族)
家庭内で行われた商人教育	名門学校によるエリート教育
妻は貴重な経営資源	妻は、依然として貴重な経営資源
結婚は見合い	結婚は主に自由恋愛+見合い
共同体と非常強い関わりを持つ	共同体との関わりが弱くなる傾向

出典：張(2007)を参考に作成した。

4 本研究の分析枠組みおよび今後のリサーチ問題

4.1 本研究の分析枠組み

以上では、本研究の問題意識を明確にした上で、中国の家族文化に関する甘（2002）、姚ほか（2002）、応（2005）等の先行研究を踏まえながら、近代中国における家族の変容を考察してきた。

本研究は、なぜ、温州商人の人的ネットワークの役割に対する論者たちの結論が違うのかという問題意識に基づいて、商人家族は、人的ネットワークを活用して、市場経済の下で高い市場パフォーマンスを収めながらも、市場パフォーマンスに影響され、変容する存在であると考え、商人家族と市場との関わりを考察していきたい。従って、本研究が依拠する分析枠組みは、以下のようになる。

- ① 温州の商人家族は、人的ネットワークを活用することにより、市場経済の下で、市場活動を展開し、成功を収める。
- ② 温州の商人家族は、市場活動の成功を収めつつも、市場パフォーマンスに影響される存在である。

以上の研究枠組みに基づいて、本研究は、①温州の商人家族は、いかに人的ネットワークを活用し、市場チャンスを捉え、成功を収めてきたのかを考察しつつ、②市場での成功が、商人家族にどういった変化を与え、それによって、商人家族がいかに変容してきたのか、③そして、商人家族の変容が、市場にける商人のパフォーマンスにどういうふうに影響を与えているのかという三つのリサーチ問題を導出し、今後の研究において、それらの課題について考察し、温州商人の人的ネットワークの可変性を解

明したいと考えている。

本研究は、平成26年度山梨学院大学特別研究助成金の支援を受けて行われた研究成果の一部である。支援を頂いたことに対して、ここで厚く謝意を表する。

註

- 1 筆者注：「一損俱損、一栄俱栄」とは、一人の家族メンバーが損をすると、全ての家族メンバーに損をもたらすことになる。一人の家族メンバーが繁栄すると、全ての家族メンバーに繁栄をもたらすという意味である。
- 2 甘（2002）、pp.180～188を参考した。
- 3 筆者注：族譜の修繕は、戦争や内乱等で、離散した家族を見つけるためのひとつの手段であるが、その背景に、改革・開放後の中国において、新中国成立後に、香港や台湾、欧米に離散した華僑が、1980年代初頭から、中国大陸での『尋根活動』（先祖や家族を探すという意味）が展開され、それにより、華僑が多いとされる中国沿岸部の広東省、浙江省、福建省などの地域において、族譜の修繕活動が盛んに行われ、華僑の出生地に莫大な投資資本が流入したという。特に、広東省を中心とする珠江デルタ地域は、香港や台湾の華僑資本の進出により、著しい経済発展を実現した。
- 4 筆者注：近代中国の一人っ子政策は、1979年から厳しく実施され始めた。1949年解放後、中国の人口は5億未満だったが、1960年代、中国とソ連の関係が悪化し、全中国は防空壕を掘って、戦争の準備をした。毛沢東氏は「戦争の勝負を定める決定的な要素は人間だ」と唱え、急激な人口膨張を促進した。そのため、1950年代、最初に人口抑制策を提出した学者馬寅初は、文化大革命の時、厳しく批判された。1979年前後、

中国の人口は爆発のように8億人になり、労働力の過剰が生じ、就職難の時代に入った。改革・開放後、鄧小平氏は国の方針を変え、中心を政治から経済発展と対外開放に移して、人口問題を重要視し始め、都会では「夫婦二人の間で、子供一人しか生まれない」「晩婚晩育」という厳しい人口政策を打ち出したが、少数民族については、2番目の子供の出産が認められるため、あまり制限は設けられていない。

5 鈴木（1999）によると、特に、中国の都市部は、顕著である。三世同居の家族の場合、未成年の子供を持つ親にとって、一人っ子は、生涯に唯一生み育てることのできる子供であり、複数の子供を養育する以上に自分の愛情を注ぐという子供の育て方になりうる。一人の子供が、両親二人、祖父母四人から、2重の甘やかしを受けている。そのため、数多くの「小皇帝」「小姫様」が誕生した。親や祖父母の過保護の下で、子供の躰けがうまくいかないのが現実問題のようである。

6 温州の商人家族の実態については、温州商人の定量データと定性データを用いた張（2010）に詳しい。

参考文献：

- 石井淳蔵（1994）「商人と家族」、『国民経済雑誌』、第170巻第1号、pp.19～36。
- 石井淳蔵（1996）『商人家族と市場社会』、有斐閣。
- 張華（2007）「ネットワーク分析からみる商人家族—温州商人の人的ネットワークを中心に」、『神戸大学大学院経営学研究科修士論文』。
- 張華（2008）「商人家族と市場社会とのダイナミズム—張一族の事例を中心に」、『神戸大学大学院経営学研究科第二論文』。

張華（2009）「商人家族と市場社会のダイナミズム（前編）」、『六甲台論集』第56巻第2号、pp.35～47、神戸大学大学院経営研究会。

張華（2009）「商人家族と市場社会のダイナミズム（後編）」、『六甲台論集』第56巻第3号、pp.29～46、神戸大学大学院経営研究会。

張華（2010）「温州商人の人的ネットワーク～商人家族と市場のダイナミズム～」、『神戸大学大学院経営学研究科博士論文』。

張華（2012）「温州商人のビジネスモデルに関する考察：人的ネットワークと経営特性を中心に」、『山梨学院大学現代ビジネス研究』、第5号、pp.33～42。

張華（2013）「温州商人の人的ネットワークの類型形成のメカニズムに関する考察」、『山梨学院大学現代ビジネス研究』、第6号、pp.39～51。

張華（2014）「温州商人の市場活動に関する研究の系譜」、『山梨学院大学現代ビジネス研究』、第7号、pp.3～12。

張華（2015）「温州商人の人的ネットワークの類型と役割」、『山梨学院大学現代ビジネス研究』第8号、pp.39～58。

西口敏宏・辻田素子・許丹（2005年）「温州の繁栄と小世界ネットワーク」、『一橋ビジネス・レビュー』、52巻4号、pp.22～38。

西口敏宏（2007）『遠距離交際と近所づきあい—成功する組織ネットワーク戦略』、NTT出版。

王春光（1995）『社会の流動と社会の再構築』、浙江人民出版社。

王春光（1999）「パリの温州人—独特の社会融合方式」、『中国社会科学』、1999年第6期、pp.106～119。

王春光（2000a）「動いている社会ネットワーク—パリと北京にける温州商人の行動

- 方式』、『社会学研究』、2000年第3期、
pp.109～123。
- 王春光（2000b）『パリの温州人』、江西人民出版社。
- 史晋川（2004）「温州モデルの歴史制度分析」、
『浙江社会科学』、第2期、pp.16～20。
- 陳冬昇（2003）「関係主義との決別」、希望
編（2005）『「温州モデル」の歴史命運』、
pp.261～264、経済科学出版社。
- 姚賢涛・王連娟（2002）『中国家族企業－現状、
問題と対策』、企業管理出版社。
- 甘徳安（2002）『中国家族企業研究』、中国社
会科学出版社。
- 応映紅（2005）『家族企業の制度創新』、社会
科学文献出版社。
- 郭躍進（2003）『家族企業の経営管理』、経済
管理出版社。
- 黄路路（2005）「温州民営経済の家族特色と発
展』、『市場週刊』、2005年第1期、pp.32
～34。
- 蔡克驕（1999）「温州市民営企業家の政治参
加に関する調査』、『国家行政学院学報』、
2000年第3期、pp.50～55。